社会福祉法人豊中市社会福祉協議会

ボランティアセンターだより

１９９７年（平成9年）　3月３１日
第２５号
社会福祉法人豊中市社会福祉協議会
ボランティアセンターだより編集委員会
〒560豊中市中桜塚2-28-7　☎848-1000

楽しんでます子育て支援

～家事援助グループ　そよかぜ～

掃除、洗濯、買い物等、子育て中のお母さんのお手伝いを中心に活動すると共に、一歳半健診のお手伝いもしています。

最近では双子ちゃんのいる家庭よりの依頼が多くなりました。訪問した直後は自信がなく不安そうであったお母さんが、次第に「お母ちゃんの顔」になり、工夫をしながら、私たちボランティアの手から離れていくときは、「がんばって。」と声援を送ると共に、可愛くなっていく赤ちゃんと別れる淋しさもあります。しかし、また、新しい赤ちゃんと新米お母さんとの出会いが待っています。

いつか町の中で成長したお子さんと会えることを楽しみに活動を続けています。

（T．H）

声

最近日本の社会福祉は、家族の絆の弱体化と少子化の進む中で地域と家族の扶養に頼り、公的責任を後退させ、民間や私的対応に肩代わりさせています。つまり、「社会福祉」から「市場福祉」に移り、その結果、国民の負担（金銭、体力、精神的）が増加しています。「公助・共助・自助」決して納得のいく負担をいとうものではありません。しかし、このような施策立案を推し進めている人達は、どうも私達の生存権保障を最高目的としているようには思えないのです。官僚や政治家としての地位を保つために福祉を手段として選んだとしか考えられないのです。カネに弱く、接待のタダ飯、タダ酒をよろこび、世間では即時懲戒免職になるはずの人間を臆面もなくかばい合いする『ていたらく』には、あきれて言葉もでない始末です。これでは、施策も建前・本音裏表と複雑になるのも当然です。

日本海沖重油流出事故支援の街頭募金に立ち、私達は今こそ〈熱い胸と冷たい頭〉で福祉施策の何が本物であるかを、しっかりと見分ける感性を磨かなければならないと痛切に感じました。そして、自発性・福祉性・無償性の私達ボランティアは提言を行い、公的責任でまかなうべきものは制度化させる存在でもあることを確認し、ボランティア活動を財政負担の節減に役立つ安上がり施策と位置付けさせてはなりません。それだけに現在、地域でほとんど女性達の手によって進められている小地域ネットワークづくりも、行政による組織化ではなく、地域に住む生活者の連帯感や共同性という絆の視点から、主体的につくり育て、拡充していきたいものです。

（聴くの会　谷戸　忠彦）

みんなで手作り！

第４回豊中ボランティアフェスティバル

平成９年２月２３日（日）に豊中市民会館で第４回豊中ボランティアフェスティバルが開催されました。当日はお天気にも恵まれ、１４００人もの方々が参加されました。

今年はステージ発表が大集会室で行われたためか、出演者と見ている側の心の距離が大変近く感じられ会場が一体となって楽しめました。ステージの進行の様子は手話と要約筆記によって耳のご不自由な方々にも届けられました。また、車椅子、アイマスクを始めとする各種ボランティア体験コーナー、移動入浴コーナーでの水着を着ての体験入浴、「ひとり暮らし老人の会」の方のお茶席コーナー、障害者福祉作業所の「なかま」の店、手作り介護用品、手作りおもちゃの展示コーナー等の各コーナーも大盛況でした。会場にこられた方々がそれぞれのコーナーを目で見て、手で触れて、ボランティアの方と言葉を交わすなど、温かい気持ちを手にして帰られる、手作りのフェスティバルとなりました。

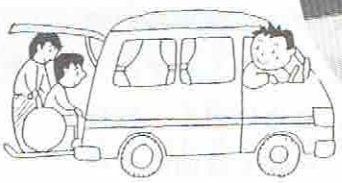
障害者福祉作業所かるがも広場によるリコーダー演奏

ボランティア体験コーナー

左から
対面朗読ボランティアグループヴォイス
瀬戸　一恵さん
原田校区ボランティア部会
戸谷　文代さん
豊中市社協ボランティアグループ ステッキ
斎藤　杏子さん
豊中市社協災害支援ネットワーク ぶどうの木
川上　恭子さん

福祉の店「なかま」の出張店　大繁盛！

ユァーあい号体験試乗



☞当日の様子を撮影したビデオ（市社協登録ボランティアグループ“ズームイン”製作）の貸出を致します。

お問い合わせは豊中市社会福祉協議会ボランティアセンターまで　☎８４８－１０００

福祉教育協力校体験作文

「ボランティアについてわかったこと」

豊中市立新田小学校　４年　中野　慎也

ぼくは、ボランティアという言葉は知っていたけど、どういうことなのかはよくわからなかった。読売新聞（讀賣新聞）の日曜版の小学生のページに、たまたまボランティア活動について書いてあったので読んでみました。

ボランティアということは、目や耳の不自由な人たちのために手紙を書いて元気づけたり、そうじを手伝ってあげたりすることを、自主的にやることだそうです。そのほかに、手話を覚えて、耳の不自由な人と話したり、手話でゲームをして遊ぶことだそうです。耳の不自由なお年よりにとっては、ものすごくうれしいことだそうです。

ぼくは、この新聞を読んで、お年よりは、体は不自由でも、いろいろなことを知っていると思います。それに新聞によると自分たちも楽しくやっているのだそうです。ボランティアは、手話など特別なことは必要としなくても、手紙を書いたり、そうじを手伝うことも、ボランティアだということもわかりました。

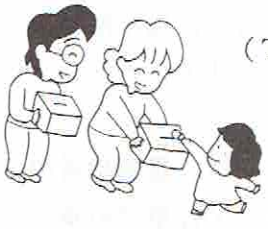
ぼくは、ボランティアの意味がわかり、とてもいい勉強になりました。ボランティアは自主的にやることだけど、近くにし設がないので、見つけたり、機会があったときぜひやりたいと思ってます。

日本海重油流出事故の支援募金にご協力を！

２月２３日のボランティアフェスティバルより豊中市内の駅で募金を始めました。２年前の震災直後、募金に立った頃を思わせる寒い日でした。

人々の表情がゆったりと見える１０時～１２時桃山台駅バスターミナル側です。張り上げた声が遠くへ消える。

はにかみながら、ひと箱ずついれてくれる幼児に皆の微笑が集まる。小銭入れの財布を無造作にはたいて行く男性。すっぱーと何げなく入れてくれる人等。箱をかかえた腕がこわばって重さを感じました。誰かが言いました「真心が一ぱいの重みですね」皆さんの一人一人の浄財を豊中市社協から現地に送り、有効に役立てていただきます。



（T．T）

川柳コーナー

ボランティアフェスティバルに際し、「ボランティア川柳」を募集したところ、震災ボランティアをテーマに総数九十六句の応募を頂きました。ボランティアフェスティバル実行委員会で、選考させていただいた結果、次の九句が入選されました。

ボランティア　踏み出せぬ　助けあい　ボランティア　ボランティア
奉仕八分に　いくじなしなり　お互いさまが　卒寿の方も　していると思うつもりが
余裕二分　六十路かな　手をつなぐ　筆を持つ　されている
中谷　珠恵　杉浦　和美　中村　浩子　光森　修子　橋詰　智

世話する人とされる人　いっといで　ボランティア　贅肉を
共に世話する　夫の留守居で　小さい輪から　ボランティアして
老人会　ボランティア　支え合い　落としてる
増野　博司　田中　紀子　堀　啓雄　松本　邦夫

◇◇◇◇◇◇◇ボランティア中級セミナー講座◇◇◇◇◇◇◇

２月１４日から３月１３日の間に５回に渡って「ボランティア中級セミナー」が開催されました。参加者は９０名にのぼり、ボランティアに対する関心の高さが伺えます。

「今後のボランティアの在り方や役割について」を大きなテーマにＮＰＯや企業ボランティア、小地域福祉ネットワーク活動、子育て支援等々、様々な角度から学ぶ機会となりました。　参加者の中には「ボランティアはしてあげることではなく、責任ある自立した行動である」「ボランティアはやさしさであるがやさしさだけではいけない。市民が声を上げることによって社会を変えていく」といった声が上がっていました。

震災から２年

あの瞬間（とき）を忘れない

災害支援活動訓練とシンポジウムを開催

阪神大震災から２年を迎えた１月１７日。豊中市社協では、住民参加型の災害支援訓練とシンポジウムを実施しました。

家屋からの救出に 備えて

克明小学校へ避難所調査

午前７時３０分に震度６弱の地震が市中心部で起きたと想定し、８時に市社協で福祉救援対策本部を設置。８時３０分には校区福祉委員、登録ボランティア、災害支援ネットワーク（震災時に登録し、活動した２５団体で結成）、当事者団体の代表が集合し、需給調整や現地調査、全壊家屋からの救援、作業所連絡会・老人介護者の会・ひとり暮らし老人の会では会員の安否確認等初期活動の取り組みを中心に行いました。

＜ボランティアは今＞

社協の皆さんや、我が“みちしるべ”グループの先輩方に支えられてのボランティアも３年余、多少手探りの状態であるが，今は、目的のある充実した日々を送って居ります。ボランティアをする前の、身体を持て余す日々からすれば、老後の生きがい此処に在りの感じです。

或る日、市の広報誌で８０才代の老齢者が知的障害の少年のプール通いに付き添っている写真入り記事を見て感動、このような事でも助けを求めている人の役に立てるのだと知り、社協に相談する気になったのです。

ただ、登録すると時間的に自由を失うのではないか、精神的な負担が大きいのではないかと心配しましたが、自分の許す範囲の余暇とささやかな労力の提供でよいとのことでボランティアグループ“みちしるべ”を紹介して頂いたのです。

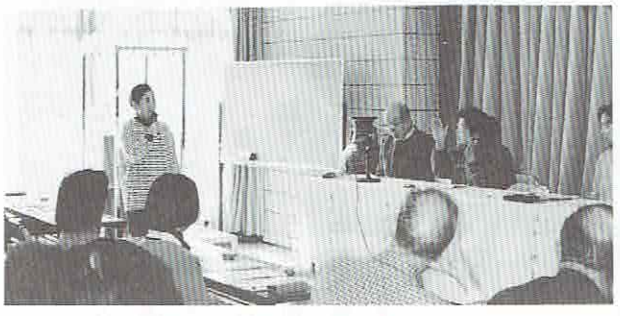
以後はボランティアスクールの受講、福祉施設の見学、各催し会やいろいろ福祉関係の行事に積極的に出席、勉強させていただいております。

現在はリハビリ体操の手助け、難病患者の話し相手、車イスでの散歩、又行事での車イス、アイマスクの体験コーナー等の手伝いもさせて貰っています。障害児の笑顔を見てその児に頼られている、ためになっているのだと、活動を通じて役立つことに自分の生きている意義を見つけ、現在の安定した幸せと健康への感謝が、少しでも人のため、世のために還元出来たらと、今日も頑張って居ります。

（みちしるべ　睦好　和之）

その後のパネルディスカッションでは「震災支援活動で求められたもの」をテーマに庄内校区福祉委員会の片岡和男氏から避難所での最初の一週間の大変さ、特に夜間のトイレ、寒さの問題ボランティアの受入れの苦労等を報告。続いて災害支援ネットワークの酒井晴子氏からは、刻々と事態が変化する中でボランティアの思いと活動内容のズレから需給調整の苦労を報告。聴覚障害を持つ大谷仲子氏からは、震災直後停電し、手話も見えない中ＦＡＸも使えず情報不足で、近くのボランティアが来てくれるまでの不安な時を過ごした報告。最後にひとり暮らし老人「長月会」の蔵田三郎氏からは、ひとり暮らしの寂しさを痛切に感じ、会員宅を自転車で安否確認した報告がありました。

白熱のシンポジウム


大谷氏の体験を手話通訳を通じて

コーディネーターの丸岡貫二氏は「緊急時にお互いの立場を理解し合い、何を一番にすべきかを確認し合うことが大切」と締めくくりました。

この他に、災害支援パネル展示や防災グッズの展示等もあり約１２０名の参加がありました。

参加者の声

- 一歩を踏み出す強い気持ちを持つよう努力していきたいです。小学校単位に地道に防災対策・意識を高めていかなければいけないと思います。
- 老齢の方々は心のケアが必要。ボランティア自身が現場の状況を知り約束したところは責任を持ってすること。情報不足の解決が必要。
- 障害を持っておられる大谷さんのお話には、大変心を動かされました。災害のときには健常者でも大変心細い思いをしましたのに障害を持っておられた方は、いかばかりかと思いました。手話をされるボランティアの方は充足しているのでしょうか。

震災引っ越しボランティア

３月から１１月の間に、豊中市内の仮設・応急住宅に住んでおられる方々（約７００世帯）が市営住宅等へ引っ越しをされます。中でも障害者・高齢者・母子世帯の方々は自分たちだけでは困難な場合もあり、そういった方たちを対象に、豊中市社協ボランティアセンターでは引っ越しの荷づくりや家財整理などのお手伝いを始めました。

ボランティアセンターで、災害支援ネットワークと市社協登録ボランティアグループのメンバーが、それぞれボランティアの派遣依頼、ボランティアの受け付けを担当し、すでに数件の派遣を実施しています。

被災された方々の新しい生活のスタートを少しでもお手伝いできればと思います。

私たち地域で助け合ってます

～ひろがる小地域福祉ネットワーク活動～

桜塚校区福祉会では、約１０年前に緊急システム委員会を作って、一人の民生委員を核に付近の常任委員たちで緊急時に対応できる小さな組織づくりに着手しました。ところが、組織づくりの作業に手間がかかって、取り敢えず、実際支援が必要な人を対象にした活動を始めることにしました。

この１０年間にシステム委員会は、①助け合いの会②友愛電話（介護支援グループが中心になって）③ミニデイサービス小さな栗の木会④要介護者を抱えた家族、独居老人、高齢者夫婦の援助⑤見守り⑥週１回の配食を実施して来ました。

最近小地域福祉ネットワークが言われ出して、再びこの組織作りに取り掛かりました。１０年前の資料を基に、今までの活動を通して得た情報、人手を取り入れて、今度はスムーズに組織づくりができると思います。そして、支援の必要な人々の掘り起こし、見守りがよりしやすくなるものと期待しております。

桜塚校区福祉会　冨田　玲子

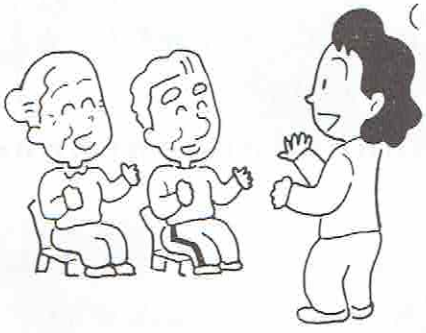
ボランティアレポーター訪問記

「山翠会」は、脳卒中などの後遺症で保健センターでの機能訓練を修了した方々が、快復したものの不安があり、お互いに励ましあいながらリハビリを続けることができたらと、自主的に発足したグループです。（現会員２５名と準会員７名）

上野坂の医療保健センターの２階の訓練室で月４回集まって「こんにちは」「おかわりないですか」と声をかけあい、血圧測定をし、体調を整え、寝てする体操、立ってする体操をビデオを見ながらゆっくりと体を動かします。こわばった体はなかなか思うようにはいかないけれど、諦めずがんばる姿はお互いに声援をかけ合っているように見えます。その後はお茶をいただきながら、会の連絡事項や会員の近況報告をし合い、また、カラオケで流行の歌を聞いたり、唄って気分転換をして２時間程を過ごします。

発会から８年目を迎え、年１回の一泊旅行と日帰りのリクレーション、年末の忘年会等、みな心を一つにして、前向きに大過なく継続していくことは難しいでしょうが、私達も応援しています。がんばって！！

（C．H）



ボランティア保険ご案内

保険の種類	ボランティア保険			有償活動保険		子供保険	移送サービス交通傷害保険	ボランティア行事保険
加入対象	ボランティア活動に参加する方			府下・地域を対象として有償活動を行っている団体		地域で活動している子供を中心としたグループ	移送サービスを行っている団体	ボランティア保険に加入できる人やそのグループが主催する行事
掛金(円)	Aプラン	Bプラン	Cプラン	Aプラン	Bプラン	200円	420円より	宿泊なし 1人 30円（50人以上） 宿泊あり 230円より
	300円	500円	2,000円	1,000円	1,500円			
保険期間	毎年4月1日から翌年3月31日までの1年間 （途中加入の場合、毎月1日、10日、20日から発効）							行事期間中（行事の1週間前までに申込み）

❀❀❀編集後記❀❀❀

あの大地震から三年目の春、桜の木は何事もなかったかように、今年もまだかたい蕾を、浅い春の空にむかって育んでいます。

他人を思いやる暖かな心を、どんなかたちで相手に伝えていくのか。手をつなぎ心をつないで「ボランティア」という言葉が死語になるような、そんな世の中になればいいなと思っています。

（T．N）